

鹿児島県三島村踏査報告

渡辺 芳郎

はじめに

九州島の南方に連なる大隅諸島、三島、十島（トカラ列島）、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島などの南西諸島は、古くより中国・東南アジアへとつながる文化交流・物資流通のメインルートのひとつであった。その文化交流・物資流通については、弥生時代のゴホウラなど南海産貝輪の流通（木下1996など）や中国産を中心とした貿易陶磁器の流通（亀井1993など）などが古くより注目されている。また近年では硫黄（山内2009など）やヤコウガイ（高梨2005など）、徳之島カムイヤキ（新里2003など）などの流通が解明されてきており、喜界島城久遺跡群の発掘調査では、古代～中世の南西諸島の歴史を考える上で注目すべき調査研究成果があがっている（池田編2008など）。

近世になると、1609年の島津氏による琉球侵攻を契機として、奄美諸島までが薩摩藩の直轄地となり、琉球も王府は存続するものの島津氏の支配を受けるようになる。しかしその一方で、琉球は明・清との冊封体制を維持しつづける。このような近世国家領域の境界域において物資流通、とくに陶磁器におけるそれがいかなるものであったかを考古学的に解明することが筆者の問題意識である。近世では肥前地方における磁器生産の開始、鹿児島における薩摩焼、沖縄における壺屋焼など沖縄産陶器の出現など、中世までの陶磁器生産が大きく変化する時代であり、南西諸島における陶磁器流通のあり方も大きく変わる。陶磁器は考古学資料として残存しやすく、大量に入手できることから、近世の南西諸島における物資流通の一端を明らかにするための有効な資料となる。

筆者はこれまで鹿児島本土域と沖縄との間の陶磁器流通や技術交流の問題について検討し、また奄美諸島やトカラ平島、種子島などで海岸部を中心に分布調査を実施してきた（渡辺2004b・2006・2013）。その過程で、鹿児島本土域と奄美諸島との間に位置する三島や十島における様相の把握が重要であるという認識を持つようになった。後述するように三島では中世までの調査研究の蓄積は比較的あるものの、近世の考古学的情報はきわめて少ない。そこでその基礎資料の収集・把握がまず求められることから、筆者らは2012年8月、鹿児島県鹿児島郡三島村（竹島・硫黄島・黒島）において考古学的な分布調査を実施した⁽¹⁾。本稿はその踏査成果の報告である⁽²⁾。

1. 三島の概要（図1）

三島村は、薩摩半島南端の長崎鼻から南南西約40kmの位置にある竹島・硫黄島、坊ノ岬から

南西約50kmに位置する黒島の三島および無人の新硫黄島や数ヶ所の岩礁よりなり、南西諸島の最北部に位置している。竹島と硫黄島は約7300年前に噴火した鬼界カルデラの北西縁にあたり、黒島は旧期琉球火山岩帯に属している（三島村誌編纂委員会編1990『三島村誌』p.1、以下『村誌』と略称）。

現在の三島への航路は、鹿児島港を発した「フェリーみしま」が、竹島港、硫黄島港、黒島大里港を経て、同島片泊港に至り、同港から往路と同じ航路で鹿児島港に戻る。元禄期に作成された『元禄国絵図』⁽³⁾よれば、薩摩半島南端の「山川湊」より「竹島」へ（十三里）、同じく「山川湊」から「硫黄島」へ（十八里）、「竹島」から「硫黄島」へ（三里）、「硫黄島」から「黒島（大里）」へ（十里）という4本の航路が描かれている。

現在の竹島では島の北側の竹島港を利用しているが、国絵図では島の南側の籠（こもり）港が利用されている。また山川湊から竹島を経て硫黄島へ行く航路と、硫黄島に直行するふたつの航路が描かれているのは、硫黄島に三島全体を支配する「硫黄島在番」が置かれていたことと関係するのであろう。近世三島は、「地頭兼御船奉行」の支配下にあり、硫黄島に「硫黄島在番」が置かれ、それぞれ「竹島庄屋」「硫黄島庄屋」「黒島庄屋」が置かれた。「黒島庄屋」はさらに「大里庄屋」「片泊庄屋」に分かれている。また各庄屋の下には「横目」「名主」「名頭」がいる（松永1972 p.130）。

明治以後、現在の三島村・十島村を含めた「十島村」として川辺郡に属したが、明治22年（1889）に大島郡となる。太平洋戦争後、現在の十島村（下七島）がアメリカの行政管理下に入り、下七島復帰後も統合せず鹿児島郡三島村として現在に至る（『村誌』 p.327-328）。

2. 三島における考古学的調査研究

三島村における考古学的調査の嚆矢としては、1972年に松永守道が『三島村秘史』中の「三島の夜明け」において、採集した石斧などを報告している（松永1972 pp.26-33）。また鹿児島大学法文学部考古学研究室による分布調査が実施され、『鹿大考古学会会報』での報告を経

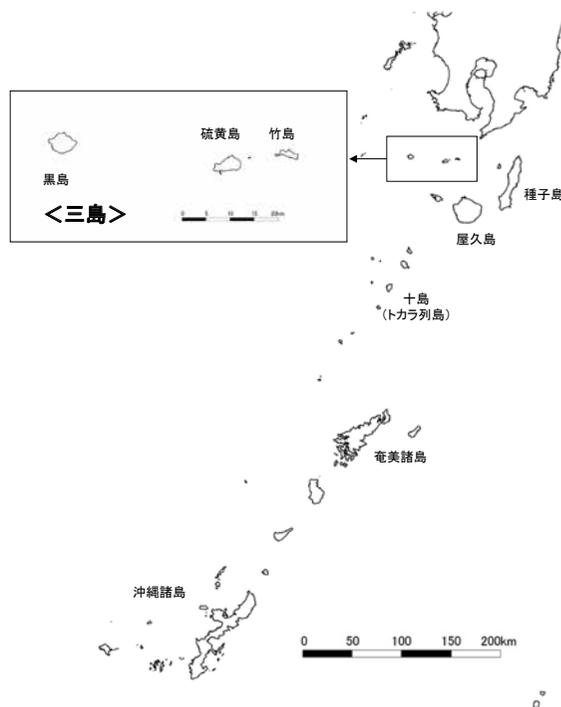


図1 関係地図

て（鹿児島大学法文学部考古学研究室1988a・b）、その成果は『三島村誌』にまとめられる（上村1990）。

その後しばらく考古学的調査は実施されなかったが、2010年代になると、橋口亘や市村高男らによる硫黄島における分布・発掘調査が実施され、その成果が随時報告されるようになった（橋口・若松2011a・b・2013、市村2013など）。また2011年に鹿児島国際大学が黒島・平家ノ城跡を発掘調査している（川宿田・平川2012など）。さらに伊藤慎二は琉球文化圏の北限に関する研究において、三島を含む南西諸島を広くかつ詳細に分布調査している（伊藤2011）。

以上のように、三島における考古学的調査は、約20年間の空白期を経て、近年、ふたたび急速に増加しつつある。しかしこれらの調査研究の多くが、先史・古代・中世をその主たる対象としており、近世に関わる考古学的情報は、伊藤の分布調査報告でわずかに触れられるにとどまり、きわめて僅少であると言わざるを得ない。

3. 調査の目的と概要

(1) 調査の目的

筆者らは、三島における近世陶磁器に関する基礎的資料の収集とその様相把握を目的として分布調査を実施した。もちろん中世以前の資料を無視するわけではなく、同様に採集した。調査地域は各島の集落部を中心とした。これは時間・予算的な制約もあるが、現在の集落が近世の集落と重なることが予想されることによるものである。

(2) 調査の概要

踏査地：鹿児島県鹿児島郡三島村（竹島・硫黄島・黒島）

踏査期間：2012年8月6日(月)～13日(月)（竹島：8/6・7、硫黄島：8/7-9、黒島：8/9-13）

調査参加者：渡辺芳郎、恵島瑛子・松崎大輔（鹿児島大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程、当時）

調査協力：三島村教育委員会

踏査地点・採集資料数

	踏査地点数	採集資料数
竹島	15	89
硫黄島	23	153
黒島片泊	11	108
黒島大里	15	57
合計	64	407

3. 調査成果⁽⁴⁾

(1) 竹島 (図2・表1)

竹島は周囲長12.8km、面積4.20㎡を有し、人口は72人である(2013年5月31日現在、以下同)⁽⁵⁾。集落は島の中央やや西寄りに位置し、現在の港は島の北西部に所在するが、『元禄国絵図』では島の南西部の籠港に寄港している。

15地点で89点を採集した。遺物は、集落内および周辺ではほぼ万遍なく採集できたが、このうち現在の十島村竹島支所・郵便局所在地とその周辺(地点14・15)で中近世の陶磁器の散布密度が濃かった。

図6-1(写真1-1)は備前産摺鉢の底部片である。7本を1単位とするカキメが2条確認できる。15~16世紀か。2(写真1-2)は肥前波佐見産の格子文皿で、内底は蛇の目釉剥ぎされている。18世紀後半。3(写真1-3)は薩摩焼加治木・始良系小皿で、底部に糸切り痕(左回転)を残す。4(写真1-4)は薩摩焼苗代川産の摺鉢口縁である。カキメは確認できないが、外に大きく外反する口縁部とその下の一条突帯は苗代川摺鉢特有の形態である。18世紀代。写真1-5は玉縁口縁の白磁である。11世紀後半~12世紀前半。写真1-6は口唇部釉剥ぎの白磁で、口縁がわずかに外反する。13世紀後半~14世紀前半。写真1-7は草花文(?)を描く初期伊万里の大皿で、17世紀前半。写真1-8は薩摩焼苗代川産土瓶の口縁部である。18世紀後半以後。

(2) 硫黄島 (図3・表2)

硫黄島は周囲長19.1km、面積11.74㎡を有し、人口は112人である。港と集落は島の西南部に所在し、東部一帯は硫黄を産出する硫黄嶽である。

23地点で153点を採集した。遺物は現在の集落の東半分におもに散布しており、とくに熊野神社東側の地点2・3に多数散布していた。現集落の東側が古くからの集落と考えられる。また集落周辺、北部~東部においても採集されたが(地点1・17・21・22など)、客土の可能性が考えられる。それゆえ本来の散布地点ではない可能性があるが、同島にその陶磁器が運び込まれていたことは間違いなからう。

図6-5(写真1-9)は中国福建・広東産と考えられる粗製の青花底部片で、高台は露胎している。16世紀後半~17世紀前半。6(写真1-10)は染付端反碗で蝶文を描く。薩摩磁器の可能性もある⁽⁶⁾。19世紀中頃。7(写真1-11)は二次焼成を受けており、釉薬が白濁している。かすかに山水文が見られる染付磁器碗である。19世紀か。8(写真1-12)は肥前産の広東碗底部で、残存部に文様は見られないが、染付の可能性もある。18世紀末~19世紀初頭。9(写真1-13)は肥前波佐見産の丸碗で、内底に二重圏線とコンニャク五弁花文、外底に銘(「青」か)を有する。18世紀後半。図7-10(写真1-14)は白磁碗で胴部に縦方向の鐫文を施す。19世紀。11(写真1-15)は染付磁器碗で、胴部に靈芝文風の草花文、内底に一条圏線と簡略化された

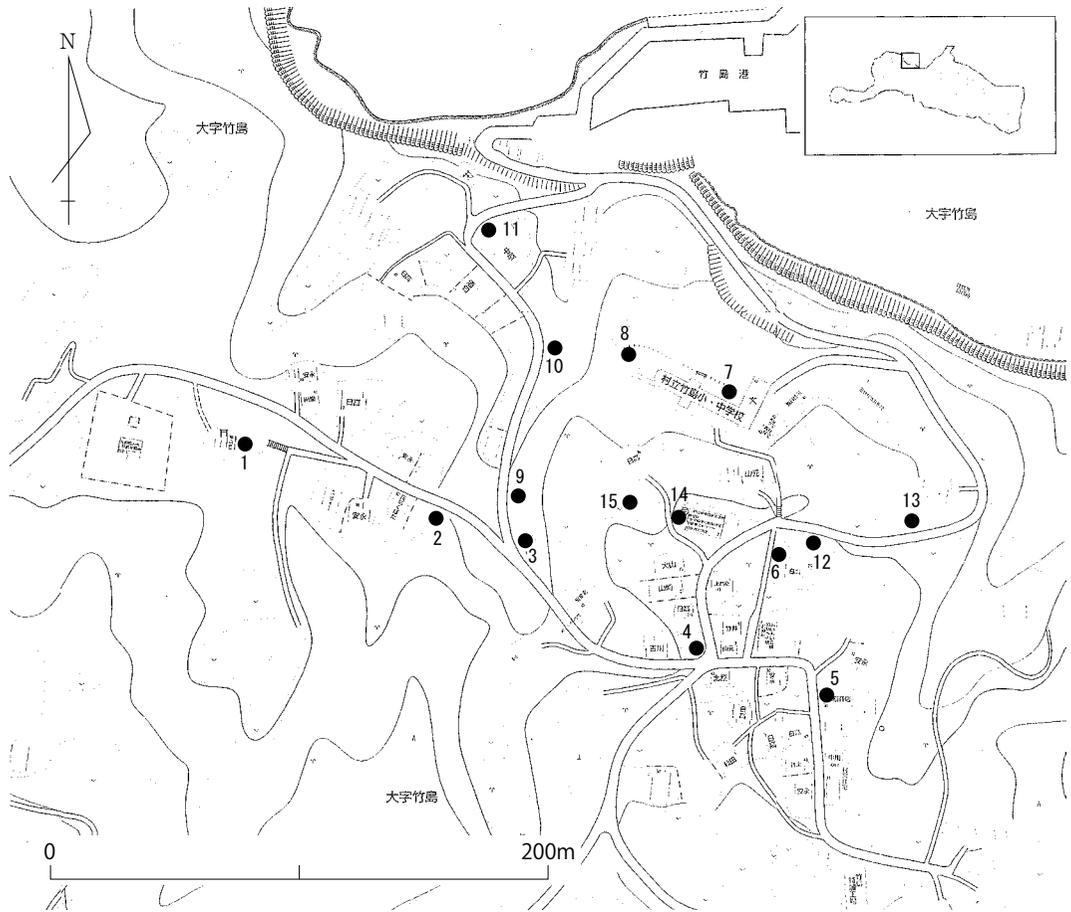


図2 竹島採集地点

表1 竹島採集資料一覧（網：図示資料）

No.	名称	点数	採集遺物	備考
1	聖神社	4	苗代川摺鉢口縁1, 近世染付1, 近現代磁器2	
2	民宿くぼた前	6	近現代磁器5, 近現代陶器1	
3	井がわ上	5	苗代川陶器1, 沖縄荒焼1, 土器1, 近現代磁器2	石祠などが所在
4	中央十字路	8	口剥ぎ白磁1, 苗代川甕口縁1, 沖縄荒焼1, 近世染付1, 近現代磁器1, 土師器1, 土器2	
5	上村	3	近現代磁器2, 肥前甕胴部片1	
6	六地藏下坂道	3	近現代磁器2, 陶器胴部1	
7	竹島小中学校校庭	1	玉縁口縁白磁片1	
8	竹島小中学校西	1	沖縄荒焼1	道路脇崖面
9	井がわ下	1	中国?白磁片1(青白磁か)	井がわの川岸, 湧水地点
10	井がわ川底	9	近現代磁器9	
11	浜道	3	波佐見蛇の目釉剥ぎ染付皿1, 近現代磁器2	
12	六地藏下畑	6	加治木始良小皿1, 肥前染付1, 近現代磁器4(型紙刷2)	
13	工場前	1	型紙刷染付皿1	
14	竹島郵便局	10	染付磁器片6(初期伊万里1), 近現代磁器1, 苗代川陶器3	
15	竹島郵便局脇の畑	28	染付磁器10(蛇の目釉剥ぎ皿1, 瓶など), 備前摺鉢1, 苗代川陶器3(土瓶口縁1など), 沖縄荒焼3, 陶器4, 土錘1, 近現代磁器6	竹島郵便局周辺は散布密度が高い。

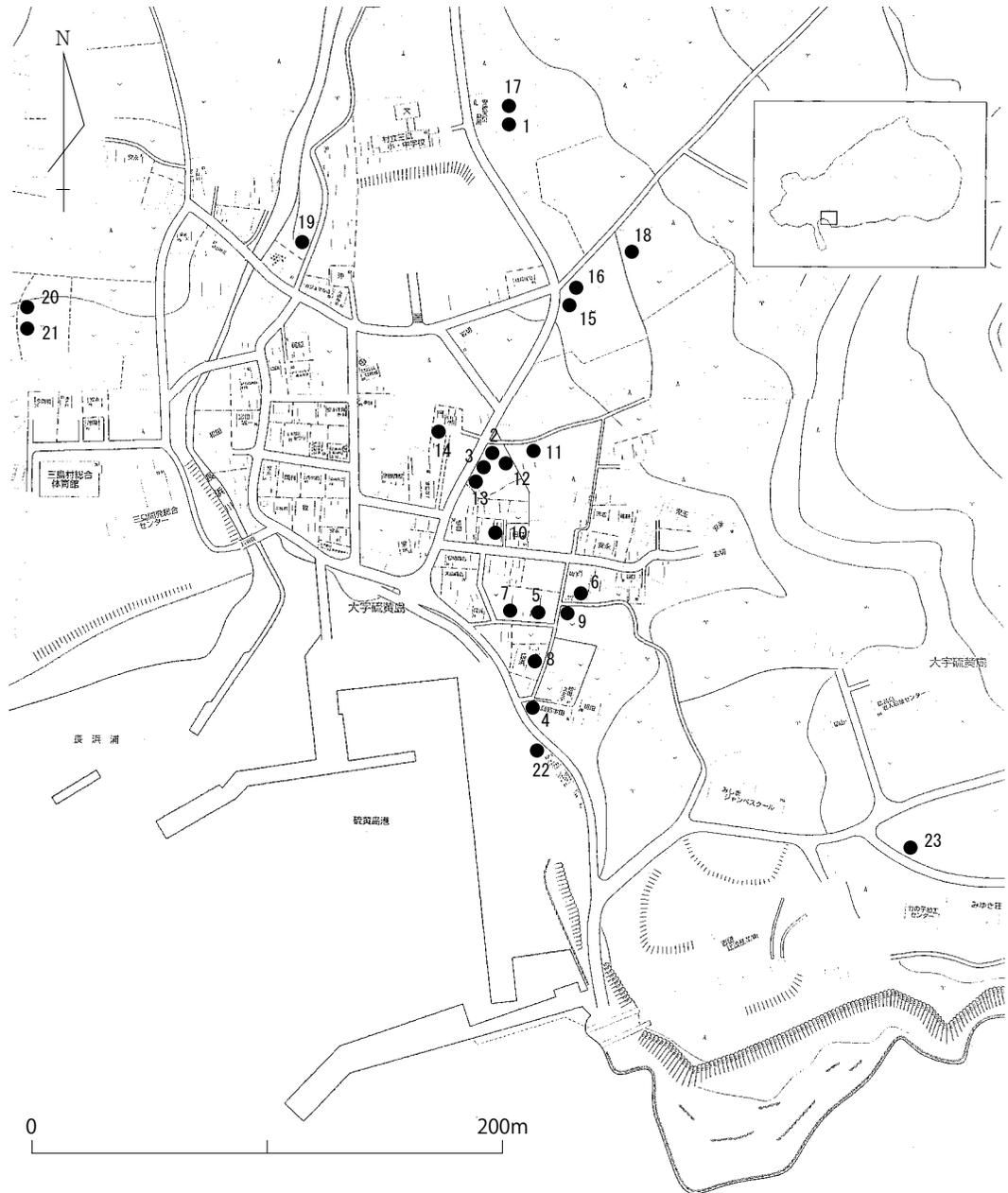


図3 硫黄島採集地点

「寿」字を描く。19世紀。12（写真2-16）はやや大振りの陶器碗で、17世紀の肥前産と推測される。13（写真2-17）は白薩摩小杯で腰部に鉄絵千鳥印を描く。19世紀か。14（写真2-18）は薩摩焼龍門司窯の小碗（杯？）で、白化粧土を施す。高台は露胎しており、外底部はトキン状をなす。18世紀後半以後の量産品である。15（写真2-19）は沖縄壺屋の上焼（施釉陶器）の土瓶蓋である。青色が鮮明のことからコバルト使用と考えられ、近代以後の製品である。16（写

表2 硫黄島採集資料一覧(網: 図示資料)

No.	名称	点数	採集遺物	備考
1	道路脇畑	11	龍門司白化粧土碗片1, 苗代川摺鉢1, 苗代川陶器片1, 陶器片5, 近現代磁器片3(型紙刷2)	
2	巨木下 (橋口第2地点)	45	近世染付磁器片8(焼成不良碗1, 碗1, 蓋1, 皿2など), 白磁3(碗, 瓶底部など), 近現代磁器12(徳利底部など), 苗代川摺鉢5, 苗代川陶器片7(甕底部, 瓶, 土瓶など), 陶器片8, 沖縄荒焼2	
3	橋口第1地点	6	近世染付碗1, 白磁碗1, 肥前陶器碗1, 陶器片3	
4	旅館本田脇 (橋口第4地点)	13	中国青磁片1, 中国?白磁片1, 近世染付片5(コンニャク印判1, 墨弾き1), 苗代川陶器片2, 近現代磁器3, 沖縄荒焼2	
5	集落内	5	苗代川摺鉢1, 龍門司小碗1, 薩摩染付磁器?1, 近世染付磁器1(肥前), 沖縄上焼土瓶蓋1	
6	薬師堂付近	1	中国?白磁片1	
7	黒木の御所跡	15	近世染付磁器片10(コンニャク五弁花皿, 蛇の目釉剥ぎ皿, 編み目文瓶など), 中国?青磁1, 陶器片4(内野山銅緑釉1)	
8	集落内	3	近世染付磁器1, 近現代磁器2	
9	集落内(石塔群周辺)	15	近世染付磁器片5(コンニャク五弁花波佐見碗など), 中国青磁片1, 白薩摩小杯(鉄絵千鳥印)1, 苗代川陶器片3, 陶器片3, 沖縄荒焼1, 土師器1	付近に苗代川瓶もあり
10	集落内(北部)	4	近世染付磁器片2, 白磁片1, 陶器片1	
11	集落内(北部)	1	中国青花片1(高台露胎)	
12	橋口第3地点	1	苗代川土瓶1	
13	橋口第1地点横 (港側)	3	苗代川土瓶1, 苗代川鉢口縁1, 肥前陶器1	
14	熊野神社	1	近世染付磁器片1	
15	集落北エリア (林の中)	1	黒釉陶器片1	
16	集落北エリア	1	瀬戸美濃染付磁器碗1	
17	集落北側(植林地)	2	青磁片1, 苗代川陶器片1	客土の可能性あり
18	集落北側	1	青花小杯口縁1	
19	集落北側	1	陶器片1	
20	集落西北端(植林地)	6	中国青磁(鎬蓮弁文)1, 近世染付磁器片2, 近現代磁器染付2, 小片1	
21	集落西北端(植林地)	8	中国青磁片2, 近現代磁器2, 陶器片4(苗代川土瓶など)	20の脇
22	硫黄島港 (旅館本田前)	12	近世染付磁器片1(コンニャク印判), 中国?白磁片1, 近現代磁器片6, 陶器片4	
23	旅館みゆき傍	1	中国青磁片1(鎬蓮弁文)	

※「橋口○」は橋口・若松2011a・bによる

真2-20)は薩摩焼苗代川産の摺鉢で、カキメがやや太く18世紀代と考えられる。17(写真2-21)も苗代川産摺鉢であるが、逆L字口縁と細いカキメから18世紀後半以後の製品と考えられる。図8-18(写真2-22)は苗代川産の算盤玉形の土瓶胴部である。18世紀後半以後。19(写真2-23)は中国青花磁器の小杯の口縁である。17世紀代の景德鎮産とされる(新垣2003)。写真2-24は薩摩焼苗代川産の甕の胴部片で、きわめて薄く内面に当て具痕を残す。17世紀代、堂平窯(関・繁昌編2006)の製品と考えられる。写真2-25・26は中国龍泉窯産の鎬蓮弁文青磁片である。小片のため年代判定が難しいが、13~14世紀であろうか。写真2-27は肥前内野山窯産の銅緑釉碗である。17世紀後半~18世紀前半。このほか図示していないが、地点4において、コ

ンニャク印判を外面に施す肥前産染付磁器片（17世紀末～18世紀前半）を採集している。

(3) 黒島

黒島は周囲長20.1km、面積15.51㎡を有し、三島ではもっとも大きい。人口は161人である。集落は東北部の大里（人口116人）と、西南部の片泊（人口45人）がある。以下集落ごとに報告する。

1) 片泊（図4・表3）

集落は東西に伸びる道路に沿って形成されている。12地点で108点を採集した。集落一帯で遺物が採集できるが、うち地点7において、小片ではあるが、多数の遺物が採集された。現在の村支所東南に位置する。

図8-20（写真3-28）は肥前産の蛇の目釉剥ぎの染付唐草文磁器皿である。18世紀。21（写真3-29）は肥前波佐見産の染付磁器碗で、胴部に簡略化した虫籠文、内底に一条圏線と格子文を描く。19世紀中頃。22（写真3-30）は肥前産の、いわゆる唐津三彩の大皿（鉢）である。白化粧土で数条の圏線と波文を施し、褐釉と緑釉を流し掛けしている。内底に2ヶ所の砂目が残る。もう1点褐釉のみが確認できる例があり、接合はしないが同一個体と考えられる。17世紀後半。写真3-31は白薩摩土瓶の口縁である。写真3-32は肥前産陶器の溝縁皿口縁である。17世紀初頭。写真3-33は中国龍泉窯の刻線蓮弁文青磁片である。15世紀後半～16世紀。写真3-34は肥前産の刷毛目陶器碗である。18世紀前半。写真3-35は胴部に釉を削って文様を描く薩摩焼苗代川産の甕である。近代以後の可能性もある。

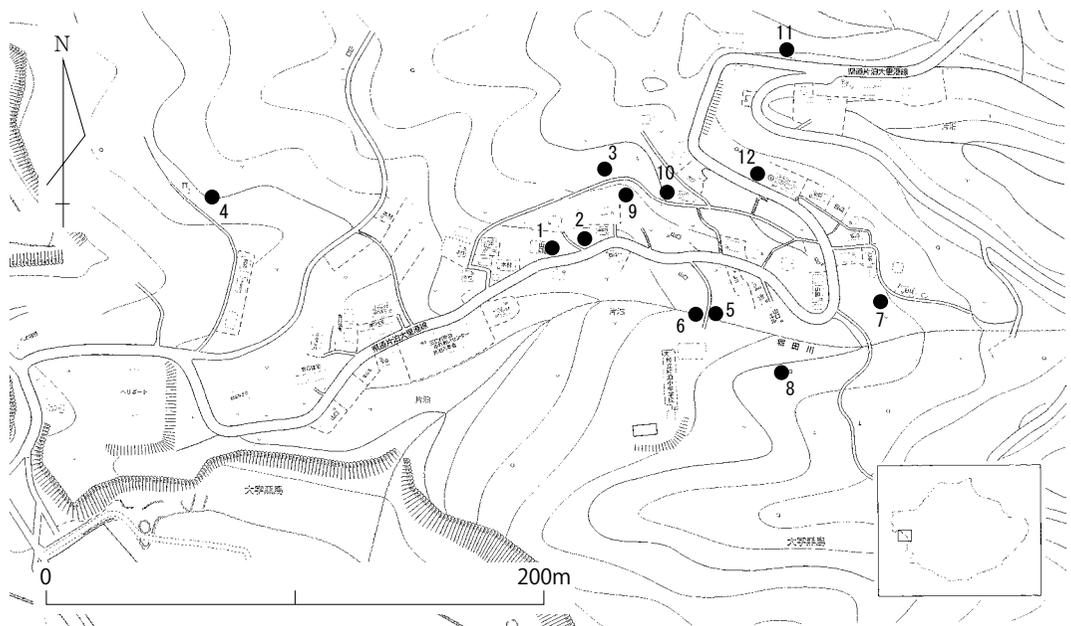


図4 黒島片泊採集地点

表3 黒島片泊採集資料一覧（網：図示資料）

No.	名称	点数	採集遺物	備考
1	主道路脇 (1)	28	近世染付磁器片5 (蛇の目釉剥ぎ皿など), 白磁片3, 近現代磁器12, 陶器片8 (肥前溝縁皿1)	民家裏, 伊藤23か?
2	主道路脇 (2)	4	近世染付磁器片2 (蛇の目釉剥ぎ皿など), 陶器片2	平坦地 (旧宅地か?)
3	集落北側道 (1)	2	近世染付磁器片1, 白磁片1	
4	菅尾神社前	5	近現代染付水注片9 (同一個体), 近現代染付皿片4	
5	片泊小学校前	1	中国青磁片1 (刻線蓮弁文)	
6	堀田川川底	8	近現代磁器片7 (型紙刷染付3), 沖縄荒焼1	
7	支所南側畑	54	近世染付磁器片16 (肥前, 波佐見など), 白磁片7, 中国青磁片1, 近現代磁器8 (型紙刷染付片3), 白薩摩土瓶口縁1, 肥前三彩皿2 (同一個体), 肥前刷毛目陶器片1, 陶器片12	
8	墓地入り口	1	近世染付磁器片1 (小杯口縁)	
9	集落北側道 (2)	1	コバルト型紙染付皿1 (蛇の目凹型高台)	
10	集落北側道 (3)	2	苗代川甕片2 (同一個体か, 口縁部と胴部, 胴部に釉剥ぎ文様)	
11	牛舎	2	中国青磁片? 2 (同一個体, 接合)	
12	支所前	1	コバルト型紙染付皿1 (蛇の目釉剥ぎ)	

※「伊藤○」は伊藤2011による

2) 大里 (図5・表4)

16地点で57点を採集した。とくに黒尾神社境内ならびに同神社参道脇の畑 (地点5・8) において多数採集された。

図8-23 (写真4-36) は高台と内底が露胎の白磁碗で、沖縄で多数出土する、いわゆる今帰仁タイプの中国福建産磁器である。13世紀後半~14世紀前半。24・25 (写真4-37・38) は福建・広東産の粗製の青花磁器である。ともに高台露胎である。16世紀後半~17世紀前半。図9-26 (写真4-39) は中国青花磁器の鉢である。口縁部外面に変形雷文 (?), 胴下部に双葉文を描き、内底にも施文が見られる。高台内は露胎である。16世紀後半~17世紀前半。27 (写真4-40) は薩摩焼苗代川産の土瓶の蓋である。18世紀後半以後。28 (写真4-41) は薩摩焼加治木・始良系碗の底部で、高台露胎で外底中央がトキン状を呈する。18世紀後半以後。29 (写真4-42) は肥前産の鉄絵陶器の脚付鉢であるが、脚部は欠損している。17世紀末~18世紀初頭。30 (写真4-43) は肥前系京焼風陶器の碗で、内底に山水文を描き、高台は露胎である。17世紀後半~18世紀前半。31 (写真4-44) は薩摩焼苗代川産の甕の口縁部から肩部にかけてである。口縁断面はT字状をなし、肩部に二条の突帯を有する。日置市美山雪山遺跡 (19世紀末の陶工の工房・居住跡) 出土資料に類例があり (宮田他編2003)、近代以後の可能性もある。写真4-45・46は蕉葉文を描く福建・広東産青花皿である。おそらく碁笥底と考えられる。接合しないが同一個体の可能性がある。16世紀。写真4-47は中国青磁盤の底部で、高台内が蛇の目釉剥ぎされている。15世紀前半。

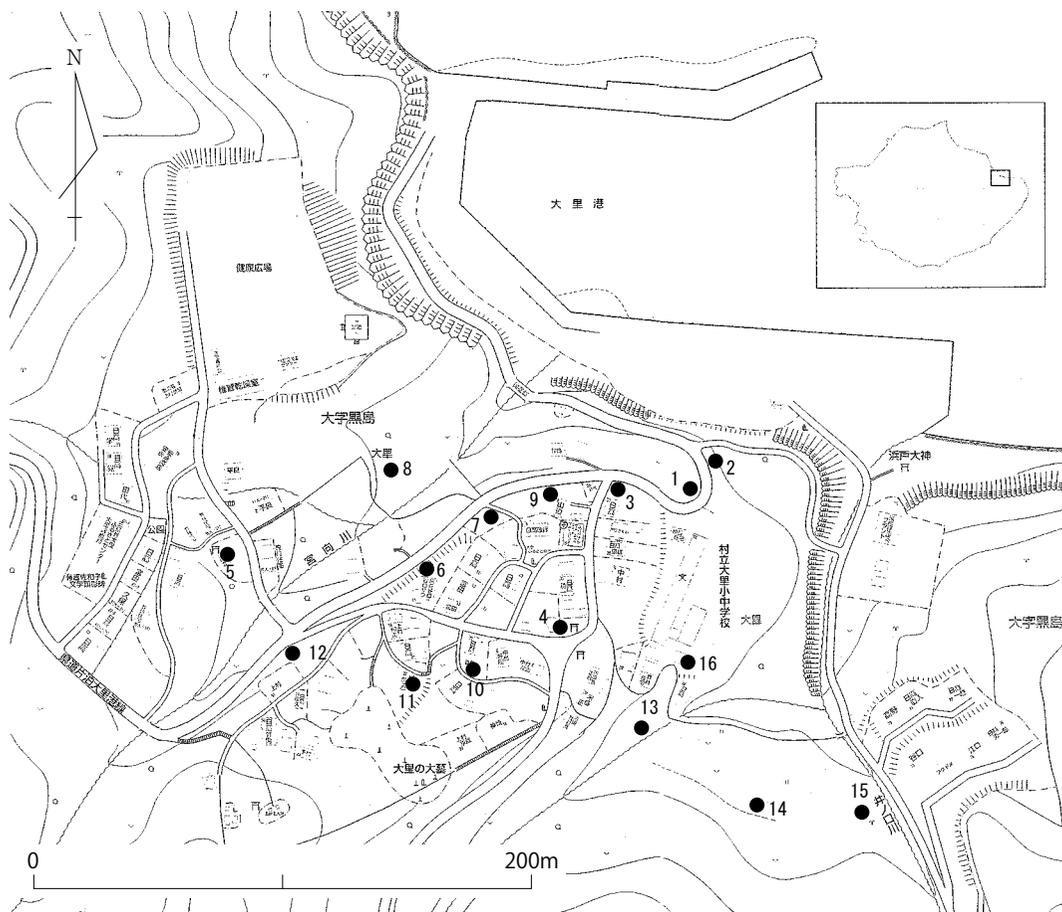


図5 黒島大里採集地点

表4 黒島大里採集資料一覧（網：図示資料）

No.	名称	点数	採集遺物	備考
1	大里小中学校前	6	縄文土器片1, 白磁片1, 苗代川土瓶片3 (同一個体か), 石器? 1 (加工痕あり)	伊藤1b
2	大里小中学校下畑	3	陶器片2 (鉄絵脚付鉢1), 土器片1	伊藤1a
3	大里小学校下	2	中国福建青花底部1 (高台内露胎), 中国白磁?片1	伊藤1
4	西側祠	5	中国青磁?口縁片1, 中国白磁底部1 (今帰仁タイプ), 陶器片3 (苗代川口縁1)	伊藤4
5	黒尾神社境内	8	陶器片2 (花瓶口縁か), 中国福建青花4 (2個体分), 中国青花1, 中国青磁片1	伊藤9
6	集落西側道路崖面	2	苗代川瓶片1, 中国青花片1	
7	往路脇	5	近世染付磁器片2, 青磁片1, 陶器片2	伊藤5
8	黒尾神社参道脇の畑	13	近世染付磁器片4, 近現代磁器3 (型紙刷り2), 陶器片6 (肥前系京焼風陶器碗1, 土瓶蓋1, 肥前甕胴部片など)	伊藤8
9	支所下道路崖面	8	近現代磁器片2, 陶器片3, 沖繩荒焼3	
10	集落南側 (1)	2	土師器2	
11	集落南側 (2)	1	苗代川陶器片1 (釉剥ぎ文様)	
12	集落西南道路崖面	2	苗代川甕口縁~肩部片1 (二条突帯), 苗代川甕胴部片1	
13	集落東南部 (1)	1	中国青磁盤底部片1 (外底鉄釉蛇の目釉剥ぎ)	
14	集落東南部 (2)	1	中国青花片1 (蓮弁文)	
15	集落東南部 (3)	1	縄文?土器片1	
16	集落東南部 (4)	1	蛇の目釉剥ぎ陶器碗1 (加治木・始良系)	大里小中学校裏手

※「伊藤○」は伊藤2011による

3. 予察

(1) 採集陶磁器の特徴と傾向

以上、報告してきた採集陶磁器をまとめると表5になる。

日本における古代～中世段階の資料として、一番古いものは竹島で採集した玉縁口縁白磁(11世紀後半～12世紀前半)である。同種の白磁は硫黄島でも採集されており(橋口・若松2011a・b)、遅くともこの時期には三島は中国陶磁器の流通圏に含まれていたことがわかる。次いで竹島では口剥ぎ白磁皿(13世紀後半～14世紀前半)があり、また同時期の資料として、「今帰仁タイプ」の白磁が黒島大里で採集されている。今帰仁タイプは、福建省など中国南部で生産され、琉球経由で流通していたと推測される製品である(新里2009など)。黒島大里におけるこの資料が直接沖縄から運ばれたのか、鹿児島本土域を経由したのかは、今のところ判断がつかない。そののち14世紀以後になると中国龍泉窯の青磁などが各島で採集されており、また16世紀以後、中国青花製品が流通するようになる。また国内産の陶器としては備前摺鉢が

表5 三島における主な採集資料

	竹島	硫黄島	黒島	
			片泊	大里
中世	玉縁口縁白磁(11c後半～12c前半) 口剥ぎ白磁皿(13c後半～14c前半) 備前摺鉢(15～16c)	龍泉窯鎬蓮弁文碗(13～14c) 青花磁器(16c後半～17c前半)	龍泉窯鎬蓮弁文碗(13～14c) 龍泉窯刻線蓮弁文碗(15c後半～16c)	今帰仁タイプ白磁碗(13c後半～14c前半) 竜泉窯青磁碗(15c) 青花蕉葉文皿(16c) 青花碗(16c末～17c初)
近世	初期伊万里大皿(17c前半) 波佐見碗・皿(18c後半～19c) 苗代川甕・壺・摺鉢・土瓶(18c～) 加治木・始良系小皿(18～19c)	青花磁器小杯(17c) ----- 肥前陶器碗(17c) ----- 肥前内野山陶器碗(17c後半～18c前半) 肥前コンニャク印判染付碗(17c末～18c前半) 肥前波佐見丸碗(18c) 肥前広東碗(18c末～19c初) 肥前端反碗(19c中頃) ----- 苗代川甕胴部(17c) 苗代川摺鉢(18c, 19c～) 苗代川甕・壺・土瓶(18c後半～) 龍門司碗(18c後半～) 鉄絵千鳥印白薩摩(19c?) 薩摩磁器(19c)	肥前陶器皿口縁(17c初頭) ----- 肥前三彩大皿(17c後半) ----- 肥前刷毛目陶器碗(18c前半) 肥前染付雪輪草花文碗(18c後半) 肥前波佐見丸文碗(18c後半) 肥前碗・皿(18～19c) ----- 苗代川甕・摺鉢・土瓶(18c～) ----- 龍門司高坏(18c後半～) 白薩摩土瓶(18～19c?)	肥前鉄絵陶器鉢(17c末～18c初) 肥前京焼風陶器碗(17c後半～18c前半) 肥前染付端反碗(19c中頃) ----- 苗代川甕・摺鉢・土瓶(18c～) 加治木始良系陶器碗(18c後半～) 薩摩磁器?(19c)

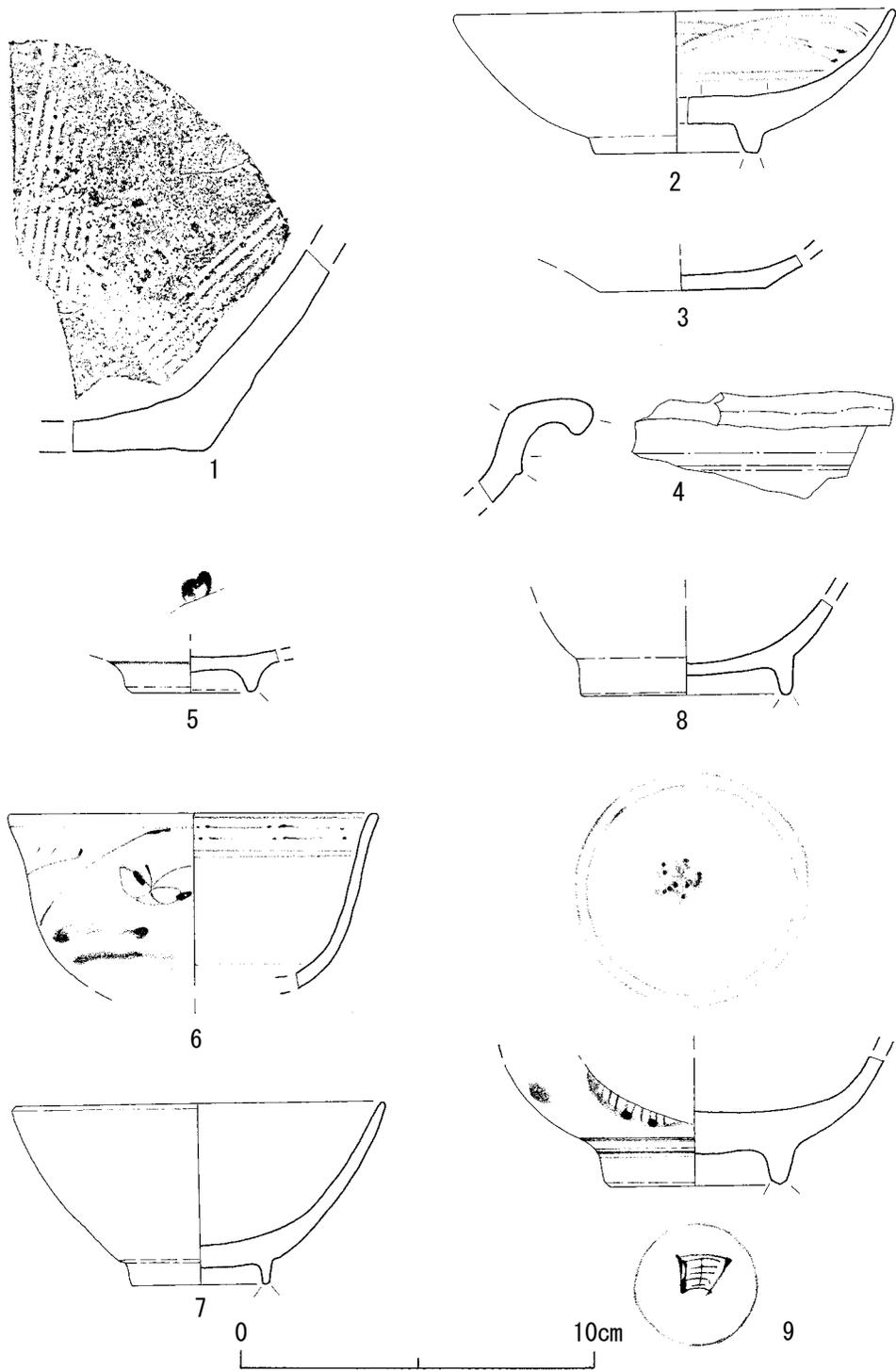


图6 三島採集資料実測図(1)

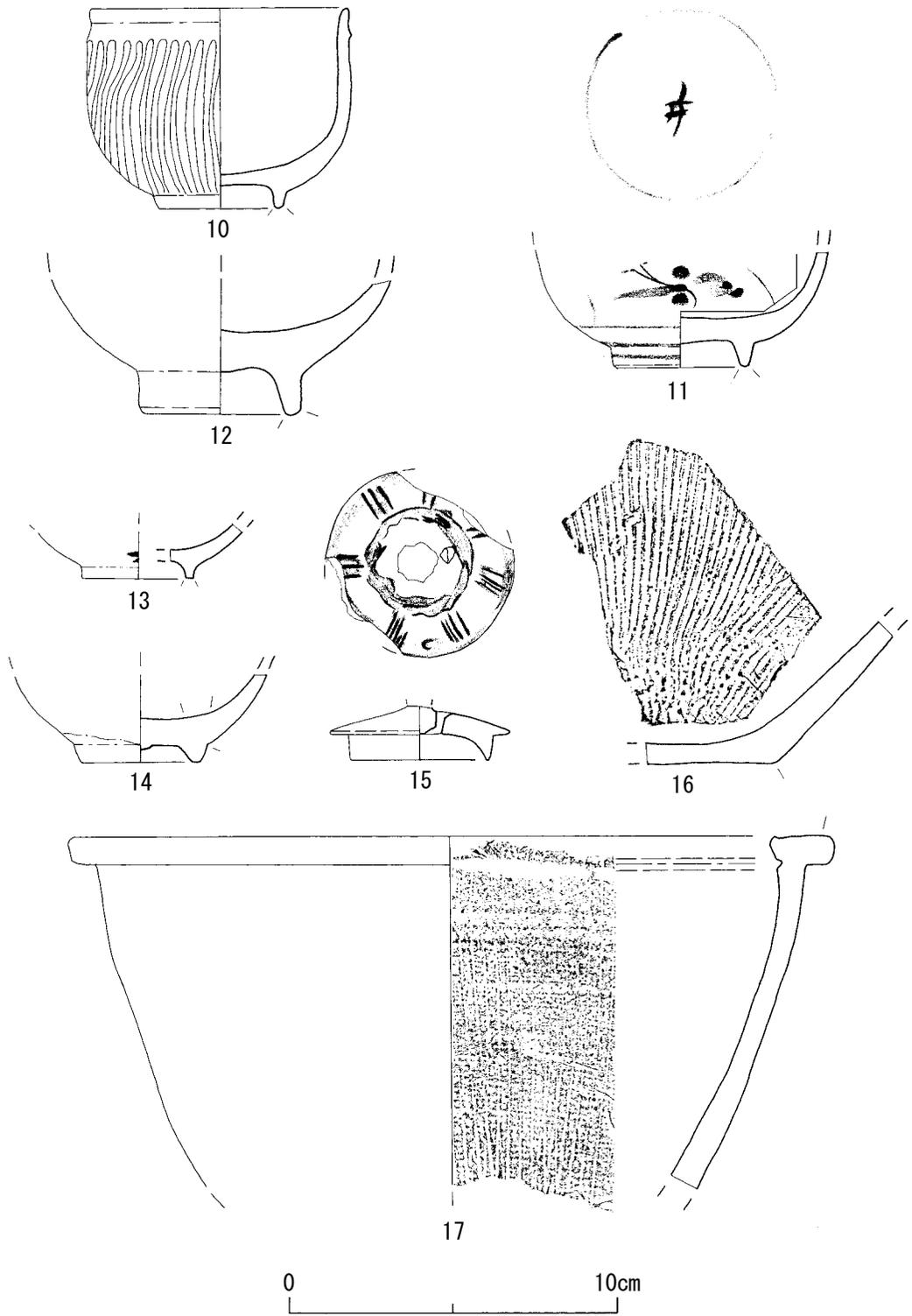


図7 三島採集資料実測図(2)

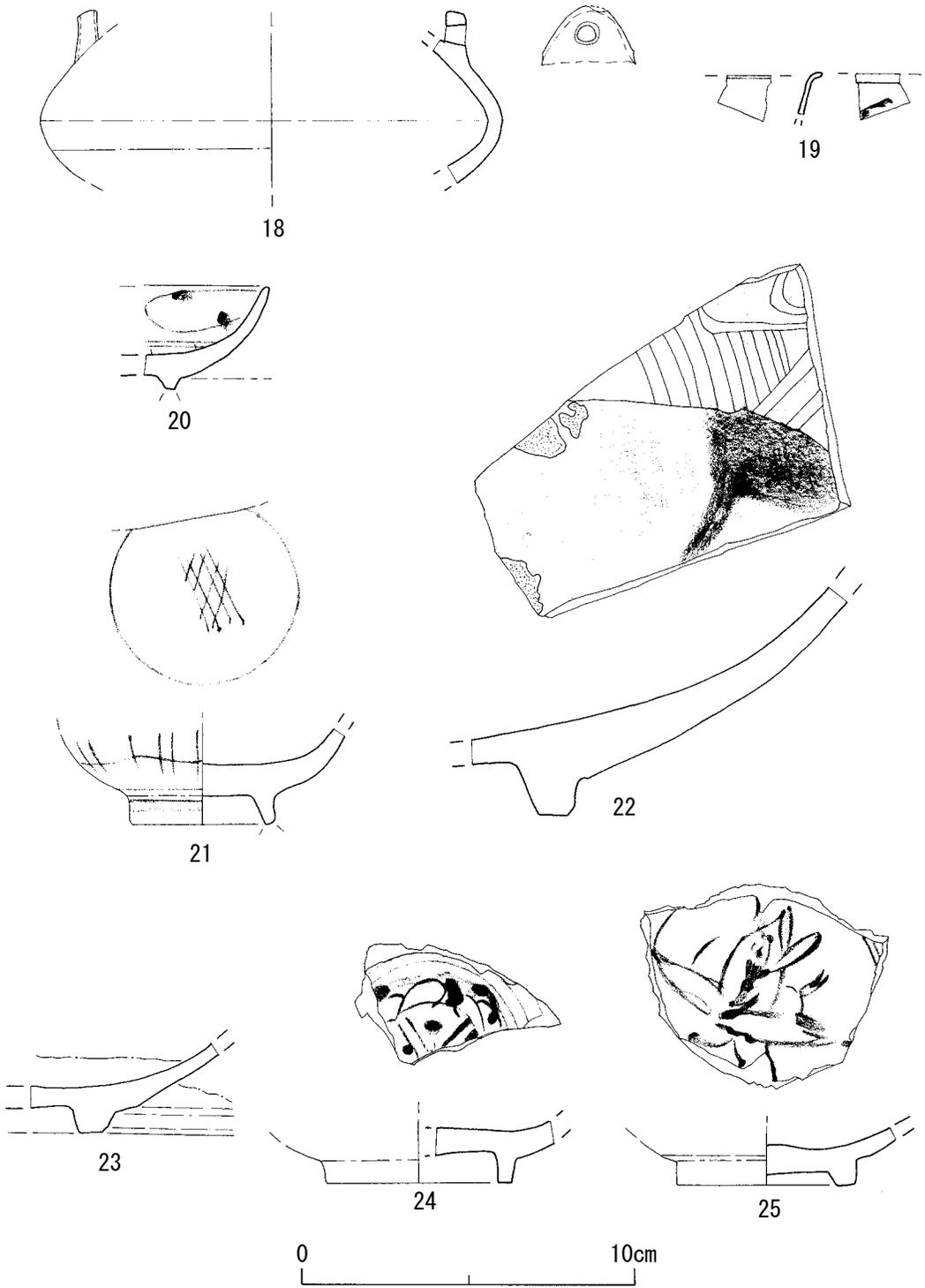


図8 三島採集資料実測図(3)

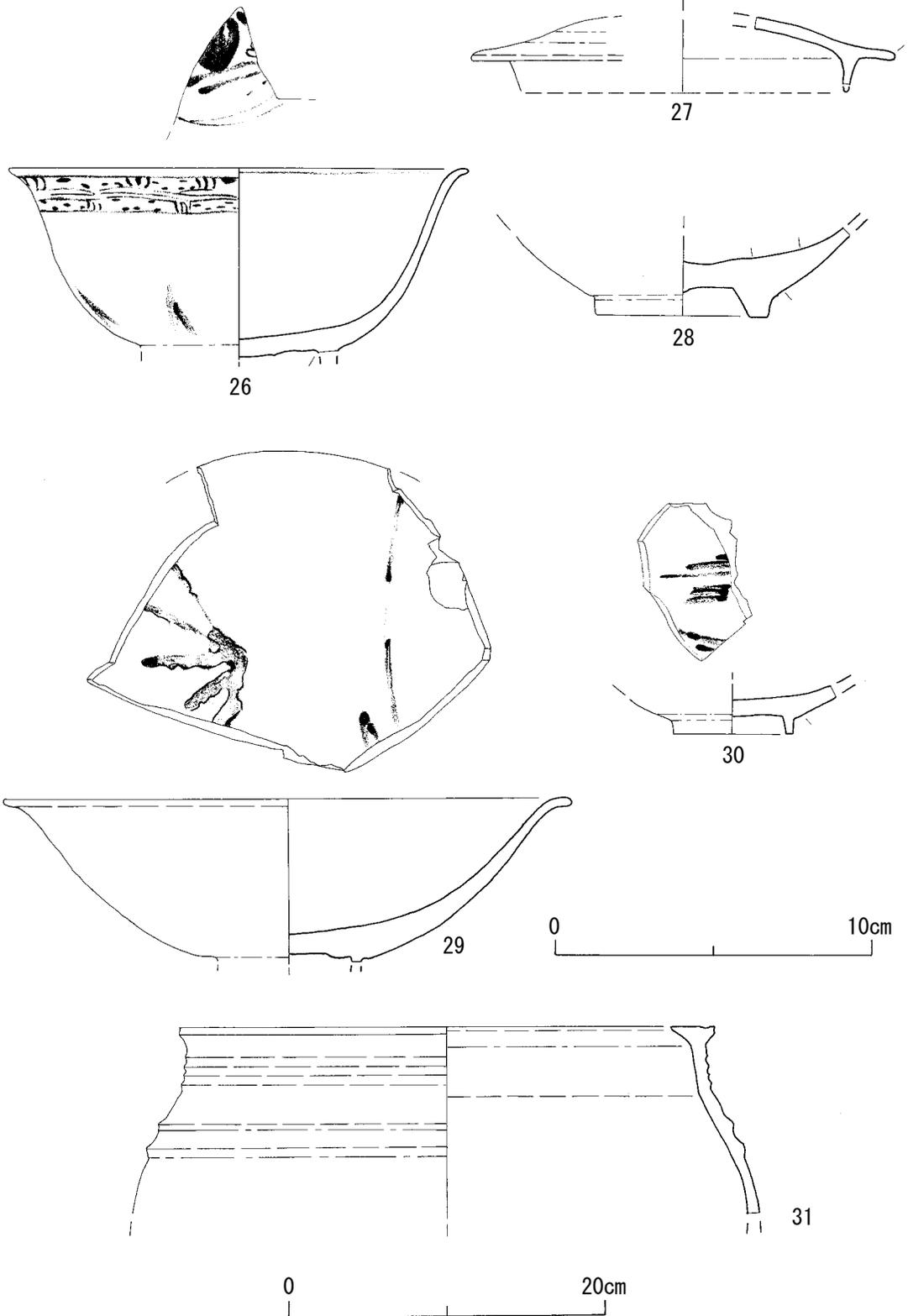


图9 三島採集資料実測図(4)

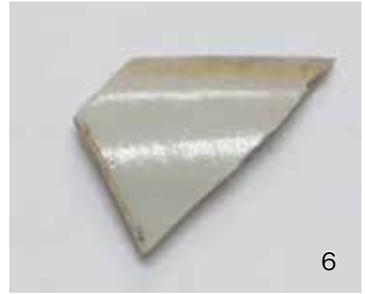


写真1 竹島・硫黄島採集資料



15



16



17



18



19



20



21



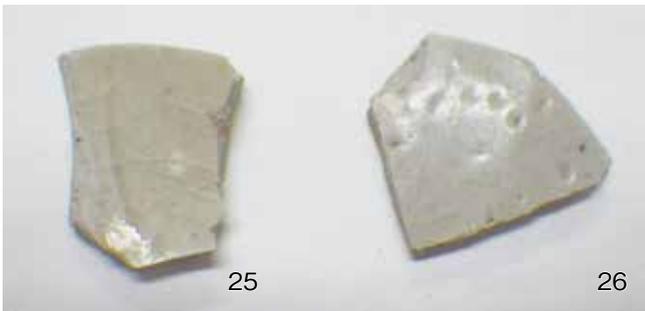
22



23



24



25

26



27

写真2 硫黄島採集資料

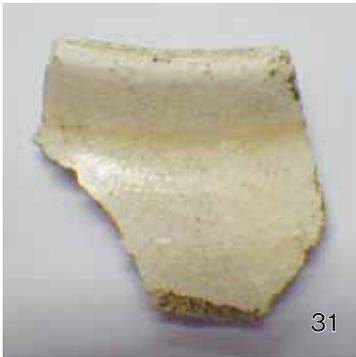


写真3 黒島片泊採集資料

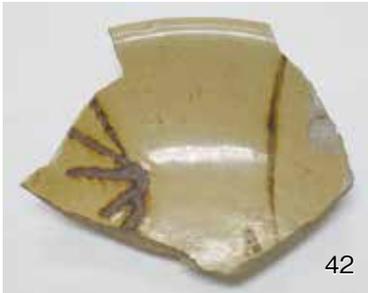


写真4 黒島大里採集資料

竹島で採集されている。以上のような流通状況は、鹿児島本土域の中世における陶磁器流通状況と大きな差異はない。ただ今帰仁タイプの位置づけは今後の検討課題となろう。

近世では、ごく早いものとして黒島片泊で肥前産溝縁皿の口縁（17世紀初頭）が採集されており、竹島には初期伊万里の染付大皿（17世紀前半）がある。また硫黄島では17世紀代の堂平窯と推測される苗代川の甕の破片が採集されており、肥前・薩摩ともに近世の早い段階から流通していたことがわかる。なお17世紀段階の苗代川の甕は、徳之島などでも採集されており（渡辺2013）、これらは甕そのものが商品として流通した可能性もあるが、同時に何らかの液体などを運ぶ容器（コンテナ）として運ばれ、のちに転用された可能性もある。このほか17世紀～18世紀前半の肥前陶器として、陶器碗、内野山銅緑釉碗、三彩大皿、鉄絵脚付鉢、京焼風陶器、刷毛目碗などが見られる。18世紀以後では、肥前磁器として波佐見の量産品が目立つ。以上のうち、初期伊万里の大皿や三彩大皿の存在は、それらを宴席などで使用する役人や庄屋などの所有品の可能性も考えられる。

また薩摩焼は硫黄島で17世紀の苗代川甕胴部片が採集されているが、増加するのは18世紀以後で、苗代川産の甕・壺・摺鉢・土瓶などがすべての島で確認できる。また加治木・始良系の小皿や碗、龍門司系の白化粧土掛け碗などもある。白薩摩では鉄絵千鳥印を有する小杯（硫黄島）や土瓶口縁（黒島片泊）が採集されている。白薩摩には「御用」製品と「商売焼」と呼ばれる商品があったことが指摘されているが（深港2013）、たとえ商品であったとしても高級品であったと推測される（渡辺2010）。初期伊万里や三彩の大皿とともに、社会的上位階層の所有品と考えられる。19世紀代には薩摩磁器と思われる染付も見いだせる。また硫黄島において17世紀代の中国青花磁器の小杯片が採集された。同種のもは沖縄や徳之島などにも見られ（新垣2003、新里編2010など）、やはり沖縄経由と推測されるが、中世の今帰仁タイプと同様、沖縄から直接入ってきたのか鹿児島本土域経由かは判然としない

以上、近世についてまとめると、17世紀から18世紀前半まで肥前産陶器が流通している点、18世紀以後、薩摩焼が増加すること、その薩摩焼は、甕や壺、摺鉢、土瓶などは苗代川産で、碗や小杯など小型食器は加治木・始良系あるいは龍門司製品であること、また肥前産（波佐見産を含む）磁器が多いという点、19世紀の薩摩磁器の可能性のある資料が見られる点など、いずれも鹿児島本土域と共通する状況と言えよう（橋口2002、渡辺2002・2010）。

各島で沖縄産陶器、とくに荒焼（無釉陶器）の壺なども多数見られたが、これらについては、はたして近世までさかのぼるかどうかはっきりしない。硫黄島採集の上焼土瓶蓋の青色はやや鮮やかでコバルト顔料を使用している可能性がある。沖縄におけるコバルト導入は明治18年以後とされる（那覇市立壺屋焼物博物館編2008 p.16）。また荒焼（無釉陶器）は近世と近代との区別が難しく、近代以後のものも多く含まれることが予想される。近世三島における沖縄産陶器の流通状況は今後の課題である。

ところで筆者は南西諸島域の陶磁器流通を考える枠組みとして「北からの流通」「南からの流通」「島嶼内産陶器の流通」の三層構造を想定し、それらが時期差・地域差を有しながら変化していると考えている。近世では「北からの流通」として肥前磁器や薩摩焼などの本土産陶磁器、「南からの流通」として沖縄を介しての清朝磁器の流通、「島嶼産陶器の流通」として沖縄産陶器の流通が重なり合っている（図10、渡辺2013）。また橋口亘は、薩摩焼の主要な市場として南西諸島域をそのひとつに挙げている（橋口2001）。今回の三島踏査で得られた陶磁器資料から考えると、島嶼域であっても本土域の流通様相に近く、南西諸島最北部に位置する三島では「北からの流通」が多くを占めていたと言えよう。

	北からの流通	南からの流通	島嶼内産陶器
I期 (~14c前半)	中国陶磁・高麗陶磁	中国陶磁(13c~)	カムイヤキ
II期 (14c後半~16c)		中国陶磁 東南アジア陶磁器	
III期 (17c~19c)	肥前陶磁・薩摩焼	中国陶磁(清朝磁器)	沖縄産陶器
IV期 (近代以後)	本土産陶磁		沖縄産陶器(荒焼)

※本図はあくまで模式図であり、ここで挙げた生産地以外の陶磁器がないわけではなく、また空白欄の流通がまったくなかったわけではない

図10 南西諸島における陶磁器流通模式図（渡辺2013より）

(2) 資料散布の粗密について

調査したそれぞれの集落では中近世の陶磁器は比較的万遍なく散布しているが、一方で他の地点に比べ比較的多数の陶磁器が散布している地点が、各集落にいくつかある。竹島では、現在の十島村竹島支所と郵便局が所在する地点14・15、硫黄島では熊野神社に隣接する地点2・3など、また黒島片泊では地点7、大里では黒尾神社境内とその周辺である地点5・8である。

黒島大里の黒尾神社は、『三国名勝図絵』によれば、祭神・由来などは不明のようだが、「大里の宗廟にて、土民の崇敬せり」とあり（原口監修1982 pp.915-916）、大里集落の宗教的中心であったと考えられる。寺社は、購入や奉納などにより、物資流通の結節点を果たしていた可能性が考えられ、地点5・8における遺物散布密度の濃さは、そのような性格の一端を示している可能性がある。同様に硫黄島の熊野神社は、近世においては「熊野三社権現社」と呼ばれ（原口監修1982 pp.883-887）、集落からもっとも近い神社である。市村高男は中世硫黄島の集落が熊野神社を中心としていた可能性を指摘している（市村2013 p.176）。神社に隣接する地点2・3の散布密度の濃さも、大里の黒尾神社と同じようなコンテクストでとらえられる可能性がある。

一方、竹島の地点14・15は、村役場支所・郵便局という公的施設に隣接している。居住空間

の限定される島嶼集落では、このような公的機関所在地は、近世以来の集落の中心的施設（役所など）を踏襲している可能性が考えられる。とするならば、その散布密度の濃さはその中心的施設に由来する可能性も考えられよう。ただし現段階では近世の竹島集落における古地図などは確認できておらず、支所・郵便局所在地が近世においてどのような性格の地域であったかには検証されていないので、上記のことは、今のところ想像の域を出ない。また大里片泊の地点7は、現在の支所に比較的近いとはいえ、竹島ほど近接はしていないため、公的施設との関係を想定するには、今のところまだ弱い。

以上のように、表面採集資料とはいえ、その散布密度の偏りは、集落構造や社会・経済構造と結びついている可能性が考えられる。しかしそれを検証するためには、古地図などの探索・照合が必要である。また大里では集落の中心部には現在も居住者が多く、必ずしも十分な分布調査ができたとは言えない。調査方法自体が有する限界も考慮に入れておく必要がある。

(3) 流通のあり方

最後に各島で採集された陶磁器がどのようなルートでもたらされたかについて検討したい。

中世の南西諸島における陶磁器流通は、いわゆる「海域アジア」における濃密な物資流通ネットワーク（四日市編2008など）の一部を構成するものであり、三島もまたそのネットワークに組み込まれていたと推測される。野中哲照は、本土域とつなぐ種子島・屋久島・口之永良部島・三島間での航路の存在を推定しており（野中2012）、これは主として「北からの流れ」の一端を構成するものと言える。

一方、黒島大里における今帰仁タイプの白磁や、硫黄島で採集されているベトナム陶器（橋口・若松2013）などは、沖縄経由か鹿児島本土域経由か判定が難しいが、「南からの流通」との関係予想させる。市村高男は日本・台湾・フィリピンを結ぶ「黒潮トライアングル」において三島が重要な位置を占めていた可能性を指摘している（市村2013）。今後、三島とより南の島嶼域との関係も視野に入れて考えていく必要がある。

近世では、先述したように『元禄国絵図』には山川湊⇔竹島、山川湊⇔硫黄島、竹島⇔硫黄島、硫黄島⇔黒島（大里）の航路が描かれている。山川湊は薩摩藩の藩港であり、また同国絵図が幕府に提出したものであることを考えると、上記の航路は藩の公的ルートと考えることができる。『三島村秘史』によれば、近世の船には、年貢を納めるための「年貢船」、公用の書類や役人を送る「御用船」、「漁船」、年貢船・漁船に附属する「伝馬」の4種類があり、年貢船・御用船の建造費は藩から貸し付け、代わりに魚や鰹節を納めさせたという（松永1972 p.446）。また三島の庄屋太夫は藩主への御目見えが許されていたという（同上 pp.220-222）。このような年貢船・御用船、あるいは御目見えのための渡航には、おそらく上記の公的ルートが使用されたと考えられる。そしてこのような公的渡航に際し、餞別や贈りもの、また依頼品の購入などにより、さまざまな物資の流通が付随していたことは、たとえば与論島の役人の日記などが

らうかがいしれる（先田編著2012 pp.127-128など）。三島における陶磁器流通の一端も、このような公的渡航に付随していた可能性がある。

公的ルート以外の物資流通については、残念ながら現段階で近世における同時代史料を確認できていない。そこで明治27年（1894）に奄美大島島司となった笹森儀助（1845-1915）が、同28年に三島・十島を踏査したときの記録『拾島状況録』（笹森1968）の記述を参照したい。

同著によれば、三島には商人や商店はないという⁽⁷⁾。ではどのようにして陶磁器を含む日用品を入手したかという、竹島や黒島では枕崎などの造船の金主に海産物・農産物を納め、その見返りとして日用什器の供給を受けたとある（笹森1968 p.124・158）⁽⁸⁾。また黒島では「需要ハ枕崎若クハ鹿児島ニ就キ之ヲ購ヒ若シクハ漁船ニ托シ、購求スルコトアリ」（同 p.157）とある。前者については、枕崎の資金で造船するのは明治以後になってからというので（松永1972 p.446）、近世までさかのぼらせることは難しいが、後者のように漁船などに託しての物品の購入は、近世においても十分にありえるのではなかろうか。公的ルート以外にも多様な物資流通の存在も視野に入れておく必要がある。

いずれにしろ島嶼のように人口規模が小さく、不特定多数を対象とした市場が形成されない環境における物資流通は、個別的な購入や贈答などが中心であった可能性が高いのではなかろうか。

最後に近世における沖縄との関係について触れておきたい。『三国名勝図会』巻ノ二十八（1846年）には、硫黄島の物産の項に以下のようにある（原口監修1982 p.902）⁽⁹⁾。

「△鱒魚 方言 永良部鰻魚（エラブウナギ） 当島の海中に産す、琉球国人来て多く取る」

「永良部鰻魚」とは、沖縄で「イラブー」と呼ばれる高級食材であり、それを入手するために硫黄島近海に「琉球人」が来航したという。もちろんこのことが、三島と琉球間で物資流通があったことを直接意味するわけではないが、近世において両者の接触が十分にありえたことを暗示している。

おわりに

以上、三島村において実施した考古学的踏査の成果について報告するとともに、その成果に対する若干の予察を試みた。表面採集資料という資料的限界もあり、また予察については、いささか雑駁な内容に終始した。ただこれまで三島に関する近世考古学的情報が欠如していた状況に対して、多少なりとも資料の蓄積ができたのではないかと考えている。ご叱正を乞いたい。

2013年10月4日 了

謝辞

本調査の実施にあたっては、三島村教育委員会より多大なご協力を賜りました。また本田道輝氏（鹿児島大学）、橋口亘氏（南さつま市坊津歴史資料センター輝津館）、中園聡氏（鹿児島国際大学）から貴重なご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。また成稿にあたって以下の方々から有益なご教示をいただきました。文末にご芳名を記して感謝の意を表します。

雨宮瑞生・新垣力・池田榮史・市村高男・大橋康二・関根達人・橋口亘（五十音順・敬称略）

注

- (1) 2013年8月に十島村の踏査を実施した。その成果については稿を改めたい。
- (2) 本稿の内容は、第60回鹿大史学会大会（2013年7月6日、鹿児島大学）における同題の発表内容を骨子としているが、発表後の研究成果を踏まえ、加筆訂正している。
- (3) 『元禄国絵図』は国立公文書館 Digital Archives で公開しているものを参照した。
<http://www.digital.archives.go.jp/>（2013年9月26日確認）
- (4) 採集資料の産地・年代推定については、新垣2003、上田1982、小野1982、九州近世陶磁学会編2000、瀬戸他2007、中世土器研究会編1995、森田1982、渡辺2000・2004aなどを参照した。ただし推定に誤りがある場合はすべて筆者の責任である。
- (5) 各島の周囲長・面積・人口については三島村HPの記載による。
<http://mishimamura.com/>（2013年9月21日確認）
- (6) このほか各島で、小片のため判別が難しいが、薩摩磁器と思われる資料を採集している。
- (7) 竹島「土地ニ商人ナリ又行商ノ来リコトナシ」（笹森1968 p.125）。硫黄島「本島商估ナシ。（中略）曾テ加世田ノ商人商船ヲ立テ反物行商ニ来リタルコト一度、其他斯類ノモノ来リタルコトナシ」（同p.143）。黒島「島中相互間ニ於テ物品売買ナク、又商人若クハ行商人ノ来リタルコトナシト云フ」（同p.158）
- (8) このような鯉節の見返り品の内容については、明治16年（1883）の史料が残っており、その中には食品や反物のほか、茶茶わん一束（一六銭）、飯茶わん二束（二八銭）、なら茶一束（三六銭）（奈良茶碗か？）、中皿一束（三五銭）、小皿一束（三一銭）などが含まれている（松永1972 pp.254-255）。
- (9) 同様の記述は『薩隅日地理纂考』十二之巻（1871年）にも見られる（鹿児島県私立教育会編1898 p.31）。

参考引用文献

- 新垣力2003「沖縄出土の清朝磁器」『沖縄埋文研究』1 pp.73-88
- 池田榮史編2008『古代中世の境界領域－キカイガシマの世界－』高志書院
- 市村高男2013「中世日本の西の境界領域と黒潮トライアングル研究－鹿児島県三島村硫黄島の調査を踏まえて－」『黒潮圏科学』6-2 pp.174-187
- 伊藤慎二2011『琉球文化圏の北限に関する考古学的基礎研究（中間報告）』國學院大學研究開発推進機構
- 上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』2 pp.55-70
- 小野正敏1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』2 pp.71-88
- 鹿児島県私立教育会編1898『薩隅日地理纂考』同会
- 鹿児島大学法文学部考古学研究室1988a「黒島（鹿児島郡）片泊小・中学校所蔵の滑石製石鍋について」『鹿大考古学会会報』8 pp.2-3
- 鹿児島大学法文学部考古学研究室1988b「鹿児島三島村の遺跡調査概報」『鹿大考古学会会報』9 pp.1-8
- 上村俊雄1990「遺跡調査研究の成果」『三島村誌』pp.50-67 三島村

- 亀井明德1993「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』11 pp.11-45
- 川宿田好見・平川ひろみ2012「離島における新しい博物館活動のモデル構築へ向けて－鹿児島県三島村を対象として－」『鹿児島国際大学国際文学部論叢』12(4) pp.375-392
- 木下尚子1996『南島貝文化の研究－貝の道の考古学－』法政大学出版局
- 九州近世陶磁学会編2000『九州陶磁の編年』同会
- 先田光演編著2012『与論島の古文書を読む』南方新社
- 笹森儀助1968「拾島状況録」『日本庶民生活史料集成』第一巻 pp.117-299 三一書房
- 新里亮人2003「徳之島カムイヤキ古窯産製品の流通とその特質」『先史学・考古学論究IV』pp.387-413 龍田考古会
- 新里亮人2009「九州・琉球列島における14世紀前後の中国陶磁と福建産白磁」『13～14世紀の琉球と福建』pp.145-153 熊本大学文学部
- 新里亮人編2010『中筋川トゥール墓跡』伊仙町教育委員会
- 関明恵・繁昌正幸編2006『堂平窯跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 瀬戸哲也他2007「沖縄における貿易陶磁研究－14～16世紀を中心に－」『沖縄埋文研究』5 pp.55-75
- 高梨修2005『ヤコウガイの考古学』ものが語る歴史10 同成社
- 中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 那覇市立壺屋焼物博物館編2008『壺屋焼－近代百年のあゆみ』展図録 同館
- 野中哲照2012「薩摩硫黄島の境界性と『平家物語』」『鹿児島国際大学国際文化部論集』13(2) pp.212-234
- 橋口亘2001「南西諸島にもたらされた近世薩摩焼－近世薩摩焼の南と北－」『からから』10 pp.9-16
- 橋口亘2002「鹿児島県地域における16～19世紀の陶磁器の出土様相－鹿児島県地域の近世陶磁器流通－」『鹿児島地域史研究』1 pp.3-14
- 橋口亘・若松重弘2011a「鹿児島県三島村硫黄島採集の貿易陶磁」『南日本文化財研究』10 pp.1-5
- 橋口亘・若松重弘2011b「(続)鹿児島県三島村硫黄島採集の貿易陶磁」『南日本文化財研究』11 pp.1-5
- 橋口亘・若松重弘2013「鹿児島県三島村硫黄島採取のベトナム焼締陶器」『南日本文化財研究』17 pp.4-7
- 原口虎雄監修1982『三国名勝図会』第二巻 新潮社
- 深港恭子2013「千鳥印のある白薩摩と商売焼についての一考察－『立野並苗代川焼物高麗人渡来在附由来記』を中心に－」『からから』27 pp.25-31
- 松永守道1972『三島村秘史』三島村
- 三島村誌編纂委員会編1990『三島村誌』三島村
- 宮田洋一・関明恵・三垣恵一編2003『雪山遺跡・猿引遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 森田勉1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』2 pp.47-54
- 山内晋次2009『日宋貿易と「硫黄の道」』日本史リブレット75 山川出版社
- 四日市康博編2008『モノから見た海域アジア史－モンゴル～宋元時代のアジアと日本の交流－』九州大学出版会
- 渡辺芳郎2000「近世薩摩焼摺鉢考」『鹿児島考古』34 pp.153-169
- 渡辺芳郎2002「鹿児島県・宮崎県における肥前陶磁」『国内出土の肥前陶磁－西日本の流通を探る－』pp.679-835 九州近世陶磁学会
- 渡辺芳郎2004a「元立院と龍門司－加治木・始良系陶器編年のための作業仮説－」『始良町内遺跡詳細分布調査報告書』pp.118-127 始良町教育委員会(現始良市)
- 渡辺芳郎2004b「近世陶磁器から見た鹿児島と沖縄」『第5回沖縄考古学会・鹿児島県考古学会合同学会研究発表資料集「20年の成果と今後の課題」』pp.63-78 沖縄考古学会・鹿児島県考古学会
- 渡辺芳郎2006「鹿児島県本土地域出土の近世沖縄産陶器」『陶磁器の社会史』pp.141-152 桂書房

渡辺芳郎2010「鹿児島城下出土の陶磁器と薩摩焼」『季刊 考古学』110 pp.48-51

渡辺芳郎2013「海浜採集資料から見た南西諸島の陶磁器流通」『水中文化遺産データベース作成と水中考古学の推進－水中文化遺産総合調査報告書・南西諸島編－』pp.115-121 アジア水中考古学研究所

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤（C））「近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究」（代表：渡辺芳郎、研究課題番号：24520860、平成24～26年度）による成果の一部である。